



朝熊嶽真景図

池大雅と真景図

大雅は旅行を愛し日本各地を巡歴しましたが、なかでも登山が好きで、富士山、白山、立山の日本三名山を踏破し、三岳道者と号しました。彼の描く山水画には、登山や旅行の体験に基づく鋭く深い自然観察が秘められています。

一方、江戸時代中期以後になると学問や芸術の方面で実証主義的傾向がさかんとなりましたので、絵画の世界においても、動植物や風景の実写がしばしば行われるようになります。自然を愛した大雅はこの方面でも先駆者で、南画家でありながら単に中国の山水を描くだけでは満足せず、実景の観察の上に立った真景図を多く描きました。このたびの秋季特別展「池大雅名作展」は、大画面作品を多くしましたので、総数約30点の小展示ですが、その三分の一は日本風景の真景図です。

ここにご紹介する「朝熊嶽真景図」は大雅の20代末30代初期の作品で、現在の三重県伊勢市の南東にある朝熊ヶ岳の雄大な風景を写しています。図上の自賛は「雲は簇（むら）がる東西南北の嶺、烟（けむり）は披（ひら）く十万八千嶺（がん）、竜門祇園先生に似

（しめ）し奉る。平安池無名」と読めます。このなかの祇園先生は初期の文人画家祇園南海のこととふつう考えられていますので、この絵は大雅が初めて南海に会った寛延3年（1750）から、南海の歿する宝暦元年（1751）の間に描かれたという説があります。

大雅は26才であった寛延元年（1748）に江戸に遊び、蘭学の開拓者であった野呂元丈から西洋画を見せられて大変感心したと言われますが、その西洋画なるものは、当時の日本に数多く輸入されていた銅版（エッチング）の風景画ではなかったかと想像されます。とにかく、この「朝熊嶽真景図」に認められる銅版画風の緻密な描写、適確な遠近表現は西洋画の影響によると見てよいでしょう。

本図を眺めると、そそり立つ岩峯をめぐる雲海、遠くにかすむ伊勢の海が巧みに描写されているのに驚かされます。また、空や海を青く表わすのも当時としては斬新な表現で、大雅よりややおくれる秋田藩の洋風画家や司馬江漢の先駆をなすと言うことができましよう。

季刊 美のたより No.33

昭和50年9月1日

発行 大和文華館